The Study of Verb-Object Constructions in Zhu (1982)

AOKI Moe

Keywords: Verb-Object construction, phase, predicate-logic, propositional-logic

Abstract

This study explores the Verb-Object Constructions in Zhu (1982). Based on an analysis of Aoki (2014), this paper uses propositional-logic and predicate-logic to analyze the meanings of constructions. For example,

(a) chi fan
eat meal — 'eat a meal'

This construction can be analyzed as,

(b) chi'(ϕ, fan)

This formula in (b) would read as follows.

'ϕ is chi of fan.'

For example,

(c) chi wan fan
eat finish meal — 'ate the meal'

From the viewpoint of phase, this construction can be regarded as an accomplishment situation, because the duration of time of 'chi' is limited by 'wan'. This construction can be analyzed as,

(d) chi'(ϕ, fan) & you'{chi'(ϕ, fan), wan}

This formula in (d) would read as follows.

'ϕ is chi of fan and ϕ is chi of fan is you of wan'

朱德熙（1982）の粘着型動目構造と統語型動目構造について[1)]

神奈川大学非常勤講師　青木 萌

0　はじめに

朱德熙（1982：112）は動目構造について次のように述べている。（本稿の中国語に対する翻訳および下線は全て筆者による。）

「述宾结构可以分成粘合式和组合式两类。粘合式述宾结构的述语是单独的动词（不带补语和后缀），宾语是单独的名词（不带定语）。凡不符合以上条件的述宾结构都是组合式述宾结构。」（動目構造は粘着型と統語型の二種類に分けることができる。粘着型動目構造の動語[2)]は単独の動詞（補語や接尾辞を伴わない）であり，目的語は単独の名詞（限定語を伴わない）である。以上の条件に合致しない動目構造はいずれも統語型動目構造である。）

以上の記述から一つの疑問が浮かぶ。それは即ち，動目構造を粘着型動目構造と統語型動目構造の二つに分けたことである。そこで本稿では，主として時相（phase）の概念を運用しながら，朱德熙（1982：112–113）における粘着型動目構造と統語型動目構造の違いを検討し，統語型動目構造は「有限持続タイプ」（accomplishment situation）あるいは「無限持続タイプ」（activity situation）に当て嵌まるということを主張する。また，

朱德熙（1982：112–113）の用例を論理式によって厳密に表記し，各用例に含まれている意味を明らかにする。まず次章では粘着型動目構造について考える。

1　朱德熙（1982：112）の粘着型動目構造について

以下の例は朱德熙（1982：112）において列挙されている粘着型動目構造である。

（1）吃饭（食事をとる）
（2）买票（チケットを買う）
（3）说话（話をする）
（4）上课（授業をする）
（5）打人（人を叩く）
（6）提问题（質問をする）

(1)–(6) の動目構造は，朱德熙（1982：112）が述べるように，いずれも単独の動詞と単独の目的語によって構成され，補語や接尾辞などが生起していない。即ち，(1) の“吃饭”という動目構造は，“吃”という動語と“饭”という目的語によって構成されている。(2) の“买票”は，“买”という動語と“票”という目的語によって動目構造が構成されている。(3) の“说话”という動目構造は，“说”という動語と“话”という目的語によって成り立っている。(4) における“上课”は，“上”という動語と“课”という目的語により形成された動目構造である。(5) の“打人”は，動語の“打”と目的語の“人”によって構築された動目構造である。そして (6) の“提问题”という動目構造は，“提”という動語と“问题”という目的語によって成立している，と見なしえる。そこで次章では，上記の粘着型動目構造に含まれている意味をそれぞれ論理式で厳密に記述し

てみたい。

2　粘着型動目構造の論理分析

本章では，前章で挙げた六つの粘着型動目構造（“吃饭”，“买票”，“说话”，“上课”，“打人”，“提问题”）に含まれている意味を論理式で表記する。

2.1 “吃饭”の論理式

“吃饭”を論理式で表すと次のようになる。

(7) 吃’（ϕ，饭）
　　トル　～ガ　～ヲ

この式は一つの命題によって成り立っている。即ち“吃’（ϕ，饭)”であり，これは「誰かが食事をとる」という意味を表している。

2.2 “买票”の論理式

“买票”を論理式で表すと次のようになる。

(8) 买’（ϕ，票）
　　買ウ　～ガ　～ヲ

“买’（ϕ，票)”は「誰かがチケットを買う」という意味を表している。

2.3 “说话”の論理式

“说话”は以下のような論理表記となる。

(9) 说’（ϕ，话）
　　スル　～ガ　～ヲ

“说’（ϕ，话)”は「誰かが話をする」という意を表している。

2.4 “上课”の論理式

“上课”を論理式で示すと次のように書くことができる。

(10) 上’（ϕ，课）
　　スル　～ガ　～ヲ

“上’（ϕ，课)”は「誰かが授業をする」という意を示している。

2.5 “打人”の論理式

“打人”を論理式で表すと，

(11) 打’（ϕ，人）
　　叩ク　～ガ　～ヲ

となる。“打’（ϕ，人)”の意味は「誰かが人を叩く」である。

2.6 “提问题”の論理式

“提问题”の論理式は以下の通りである。

(12) 提’（ϕ，问题）
　　スル　～ガ　　～ヲ

“提’（ϕ，问题)”は「誰かが質問をする」という意味を示している。

以上，朱德熙（1982：112）における粘着型動目構造の例を論理表記した。次章では統語型動目構造について検討する。

3　朱德熙（1982：112）の統語型動目構造について

最初に朱德熙（1982：112）の統語型動目構造の例を挙げよう。

(13) 吃完饭（食事をとり終える）

(14) 买了票（チケットを買い終えた）

(15) 说着话（話をし続けている）

（16）上点课（少し授業をする）

（17）打他（彼を叩く）

（18）提个问题（一つ質問をする）

（13）から（18）までの動目構造には補語，接尾辞，量詞あるいは代名詞が生起しているのが分かる。つまり，（13）の“吃完饭”という動目構造は，“吃”という動語と“饭”という目的語が生起し，かつ，この動語の“吃”には“完”という結果補語が後続している。（14）の“买了票”という動目構造は，動語“买”と目的語“票”が生起しているが，この動語の“买”には接尾辞の“了”が後続している。（15）の“说着话”という動目構造は，動語“说”と目的語“话”が生起し，さらには接尾辞の“着”が動語の“说”に後続している。（16）の動目構造の“上点课”は，動語が“上”で目的語が“点课”である。そしてこの“点课”の中の“点”は量詞である。（18）における“提个问题”という動目構造の動語は“提”で，目的語は“个问题”だが，この目的語の“个问题”には量詞の“个”が生起している，と理解することができる。

以上，朱德熙（1982：112）における統語型動目構造の用例を挙げた。これらの動目構造にはどのような特徴があるだろうか。龔千炎（1995）の見解を基に論じた青木（2014a）の記述を借用すると，これらの動目構造は時相（phase）の概念を有し，状況タイプ（situation type）の観点から見ると，「有限持続タイプ」（accomplishment situation）あるいは「無限持続タイプ」（activity situation）に当て嵌まると推論することができる[3)]。そこで次章では時相の概念を頼りに（13）–（18）の例について詳述する。

4　統語型動目構造の論理分析

本章では，前章で挙げた六つの統語型動目構造（“吃完饭”，“买了票”，

“说着话”，“上点课”，“打他”，“提个问题”）は「有限持続タイプ」または「無限持続タイプ」に該当することを証明する。また，これらの動目構造に包摂されている意味を厳密に論理表記する。

4.1 “吃完饭”の論理式

“吃完饭”の“吃”は［持続］の意味特徴を有しているため，論理的に言うと，“吃”は無限に［持続］を続けると考えられるが，“吃完饭”には［完成］の意を示す“完”が結果補語として生起しているので，“吃”の［持続］は限られたものとなり，必ず［終息］すると解すことができる。故に，“吃完饭”は「有限持続タイプ」の時相構造を有していると見なしえる。そこで“吃完饭”は以下のような論理式となる[4]。

(19) 吃’（φ，饭）＆有’｛吃’（φ，饭），完｝
　　トル　～ガ　～ヲ　持ツ　　～ガ　　～ヲ

この式は二つの命題と一つの連言（conjunction）“＆”によって構成されている。つまり“吃’（φ，饭）”と“有’｛吃’（φ，饭），完｝”と“＆”である[5]。以下この二つの命題が表す意味を確認しよう。まず“吃’（φ，饭）”という命題は「誰かが食事をとる」という意味を表している。次に“有’｛吃’（φ，饭），完｝”という命題は「誰かが食事をとるが［完成］という結果を持つ」という意を表し，この部分の式が時相の成立を意味している。そして，式全体としては，「誰かが食事をとり，かつ，その誰かが食事をとるが［完成］という結果を持つ」と読むことができる。

留意されたいのは，連言は前件と後件を自由に入れ替えることができるので，“吃’（φ，饭）”と“有’｛吃’（φ，饭），完｝”は前後を入れ替えて“有’｛吃’（φ，饭），完｝＆吃’（φ，饭）”と記述することもできる。だが，“吃’（φ，饭）”は“有’｛吃’（φ，饭），完｝”の第一項，即ち“有’｛吃’（φ，饭），完｝”の中の“吃’（φ，饭）”に置かれ連鎖関係を構築し

ている。換言すると，両命題は演繹モデルを形成し，“有’｛吃’（φ，饭），完｝”の生成は“吃’（φ，饭）”を下位範疇化（subcategorarization）した結果だと考えられる。故に“吃’（φ，饭）”は意図的に“有’｛吃’（φ，饭），完｝”より先に表示する。以下の論理式も，これと同様に，演繹モデルを念頭に置いた論理表記を行うことにする[6)]。

4.2 “买了票”の論理式

“买了票”は［完了］の意を示す接尾辞の“了”が生起しているが，“买了票”には既に“完”といったような［持続］の［終息］を保証する成分の意味が内在していると見なす[7)]。故に“买”の［持続］が限定され，“买了票”は「有限持続タイプ」に属すると判断できる。

では“买了票”を論理式で表記しよう。

(20) 买’（φ，票）& 有’｛买’（φ，票），完｝& 有’［有’｛买’（φ，票），完｝，了］
買ウ　～ガ　～ヲ　持ツ　～ガ　～ヲ　持ツ　～ガ　～ヲ

この式は，まず“买’（φ，票）”という命題は「誰かがチケットを買う」という意味を表している。次に“有’｛买’（φ，票），完｝”という命題は時相の成立を示し，「誰かがチケットを買うが［完成］という結果を持つ」という意味を表している。そして“有’［有’｛买’（φ，票），完｝，了］”は「誰かがチケットを買い終えるが［完了］という様態を持つ」という意を表している。即ち，式全体としては「誰かがチケットを買い，かつ，その誰かがチケットを買うが［完成］という結果を持ち，かつ，その誰かがチケットを買い終えるが［完了］という様態を持つ」と読むことができる。

4.3 “说着话”の論理式

“说着话”の“说”は［持続］の意味特徴を有し，また，“说着话”には［持続］の意味を表す接尾辞の“着”が生起しているので，この“说”が無限に［持続］することが確かに保証される。つまり“说着话”の時相構造は「無限持続タイプ」であると推測しえる。そこで“说着话”を論理式によって示すと以下のようになる。

(21) 说’（φ，话）&有’｛说’（φ，话），着｝
　　話ス　～ガ ～ヲ　持ツ　　～ガ　　～ヲ

“说’（φ，话）”は「誰かが話をする」という意味を表し，“有’｛说’（φ，话），着｝”は「誰かが話をするが［持続］という様態を持つ」という意味を表している。注目すべきは，この“有’｛说’（φ，话），着｝”の部分の式が時相の成立を意味していることである。よって，式全体としては，「誰かが話をし，かつ，その誰かが話をするが［持続］という様態を持つ」と読むことができる。

4.4 “上点课”の論理式

“上点课”の“上”は［持続］の意味特徴を有す持続動詞である。故に，“上”自体は，概念上，果てしなく［持続］を保持する可能性がある。しかし“上点课”には“上”の［持続］の量が少量であることを示す量詞“点”が生起しているので，この“上”の［持続］は際限ある［持続］であると考えられる。要するに，“上点课”は「有限持続タイプ」の時相構造を有しているのである。よって“上点课”を論理表記すると，

(22) 上’（φ，课）&有’｛上’（φ，课），点｝
　　スル　～ガ ～ヲ　持ツ　　～ガ　　～ヲ

といった式となる。この式の全体の意は「誰かが授業をし，かつ，その誰かが授業をするが少しという量を持つ」である。この式の中の二つの命題

は，まず“上’（φ，课)”が「誰かが授業をする」という意味を表し，次に“有’｛上’（φ，课)，点｝”が「誰かが授業をするが少しという量を持つ」という意を表している。つまり，この“有’｛上’（φ，课)，点｝”の式が時相の成立を意味している。

4.5 “打他”の論理式

“打他”の“打”は［持続］の意味特徴を有しているが，“打他”には代名詞の“他”が目的語として生起しているので，“打”という動作行為の対象が定まっていることが分かる。つまり“打”の［持続］は限りあるものであると理解できる。というのは，代名詞の“他”が［確定儀］を有するのは［不確定］の“人”が存在する，と考えられるからである[8)]。この見解は，本稿の第一章ですでに例示したように，朱徳熙（1982：112）が“打人”という動目構造を，時相の概念を有さないと見なしえる粘着型動目構造に当て嵌めている点からも妥当であるといえる。従って，“打他”は「有限持続タイプ」の時相構造を有していると判断しえる。そこで“打他”を論理式で示すと次のようになる。

（23）打’（φ，人）＆有’（人，他）
　　叩ク　～ガ　～ヲ　　持ツ　～ガ　～ヲ

“打’（φ，人)”は「誰かが人を叩く」という意味を表し，“有’（人，他)”は「人が彼という対象を持つ」という意を表している。そのため，この論理式全体の読みは「誰かが人を叩き，かつ，その人が彼という対象を持つ」である。留意されたいのは，この“有’（人，他)”の部分の式から時相の成立を理解できるということである。

4.6 “提个问题”の論理式

“提个问题”の時相構造は「有限持続タイプ」であると判断できる。な

ぜなら，“提个问题”の“提”は［持続］といった意味特徴を備えているため，論理上，永遠に［持続］を維持すると考えられるが，“提个问题”には量詞の“个”が生起しているので，この“提”は有限的な［持続］であると解しえるからである。従って“提个问题”の論理式は，

（24）提’（φ，问题）＆有’（问题，个）
　　スル　～ガ　　～ヲ　　持ツ　　～ガ　～ヲ

となる。“提’（φ，问题）”は「誰かが質問をする」という意味を表している。そして，“有’（问题，个）”は「質問が一つという量を持つ」という意を表し，この部分の式から時相が成立したことが分かる。そして，この二つの命題を一度に読むと「誰かが質問をし，かつ，その質問が一つという量を持つ」となる。

次章では朱德熙（1982：112–113）の記述を基に，限定語における動目構造について論じる。この動目構造に対する用例も粘着型動目構造と統語型動目構造に分けて考察することとなる。まず粘着型動目構造が限定語となる場合について考えてみよう。

5　限定語における粘着型動目構造について

本章では朱德熙（1982：112–113）の限定語における粘着型動目構造についての記述を取り上げる。初めに朱德熙（1982：112）の部分の記述を引用する。

「粘合式述宾结构往往可以直接（不带“的”字）作定语，组合式述宾结构必须加上“的”字体词化以后才能作定语。」（粘着型動目構造は，通常，そのまま（“的”を伴わず）限定語になることができるが，統語型動目構造は“的”を付加して体詞化しなければ限定語にはなれない。）

続けて朱德熙（1982：112–113）の用例を見られたい。まず限定語の部

分が粘着型動目構造である例を挙げる。なお，統語型動目構造が限定語になる例については第七章で検討する。

（25）造船技术（船を造る技術）

（26）上课教员（授業をする教員）

（27）挂号同志（登録をする同志）

（28）救济难民问题（難民を救済する問題）

（29）看电视时候（テレビを見る時）

（30）招收研究生办法（大学院生を受け入れる方法）[9)]

（25)−(30）の限定語として生起する動目構造はいずれも単独の動詞と単独の目的語によって構成され，これらには補語，接尾辞，量詞などが生起していない。即ち，（25）の“造船技术”における“造船”という動目構造は，“造”という動語と“船”という目的語によって構成されている。（26）の“上课教员”における“上课”という動目構造は，“上”という動語と“课”という目的語によって動目構造が構成されている。（27）の“挂号同志”の“挂号”という動目構造は，“挂”という動語と“号”という目的語により動目構造が構成されている。（28）の“救济难民问题”の中の動目構造の“救济难民”は，“救济”という動語と“难民”という目的語によって成り立っている。（29）の“看电视时候”の中の“看电视”は，“看”という動語と“电视”という目的語により形成された動目構造である。そして（30）の“招收研究生办法”における動目構造の“招收研究生”は，動語の“招收”と目的語の“研究生”によって構築されている，と見なしうる。

次章では上記の（25）から（30）の例における動目構造（“造船”，“上课”，“挂号”，“救济难民”，“看电视”，“招收研究生”）に対して論理表記を行う。

6　限定語における粘着型動目構造の論理分析

6.1 “造船技术”における“造船”の論理式

“造船”を論理式で表すと，

（31）造’（ϕ，船）
　　造ル　～ガ　～ヲ

となる。この“造’（ϕ，船)”という式は「誰かが船を造る」という意味を表している。

6.2 “上课教员”における“上课”の論理式

以下“上课”の論理式を見られたい。

（32）上’（ϕ，课）
　　スル　～ガ　～ヲ

“上’（ϕ，课)”は「誰かが授業をする」という意を表している。

6.3 “挂号同志”における“挂号”の論理式

以下は“挂号”の論理式である。

（33）挂’（ϕ，号）
　　スル　～ガ　～ヲ

“挂’（ϕ，号)”が表す意味は「誰かが登録をする」である。

6.4 “救济难民问题”における“救济难民”の論理式

救济难民”を論理式で示すと，

（34）救济’（ϕ，难民）
　　救済スル　～ガ　　～ヲ

と書ける。“救济’（φ，难民）”は「誰かが難民を救済する」という意味である。

6.5 “看电视时候”における“看电视”の論理式

“看电视”を論理式で示すと以下のようになる。

（35）看’（φ，电视）
　　見ル　～ガ　　～ヲ

“看’（φ，电视）”の読みは「誰かがテレビを見る」である。

6.6 “招收研究生办法”における“招收研究生”の論理式

“招收研究生”の箇所を論理式によって解析すると次のようになる。

（36）招收’（φ，研究生）
　　受ケ入レル ～ガ　　～ヲ

この“招收’（φ，研究生）”という式の読みは「誰かが大学院生を受け入れる」となる。

以上，朱德熙（1982：112）の限定語における粘着型動目構造の例を論理式で解釈した。次の第七章で挙げる（37）–（42）は統語型動目構造が限定語として生起した例である。

7　限定語における統語型動目構造について

（37）造大船的技术（大きな船を造る技術）
（38）上过课的教员（授業をしたことのある教員）
（39）挂了号的同志（登録をし終えた同志）
（40）救济他们的问题（彼らを救済する問題）
（41）看完电视的时候（テレビを見終わった時）

（42）招收这批研究生的办法（これらの大学院生を受け入れる方法）[10)]

これまでの記述を参考にすると，上記の例から以下のようなことを看取しえる。

（37）の“造大船的技术”における“造大船”という動目構造は，動語の“造”と目的語の“大船”によって構成されている。この“大船”という目的語は，形容詞の“大”が修飾語で，名詞の“船”が中心語である。（38）の“上过课的教员”における“上过课”という動目構造は，“上”が動語で，“课”が目的語だが，この動語の“上”には［過去の不確定の経験］の意を表す“过”が接尾辞として後続している。（39）の“挂了号的通知”における“挂了号”という動目構造は，“挂”が動語で，“号”が目的語だが，この動語“挂”の後に［完了］の意を示す接尾辞の“了”が生起している。（40）の“救济他们的问题”の中の“救济他们”という動目構造は，動語“救济”の目的語として代名詞の“他们”が生起していることが分かる。（41）の“看完电视的时候”の中の動目構造の“看完电视”は，動語“看”と目的語“电视”が生起し，かつ，この動語の“看”の後方には結果補語の“完”が生起している。そして（42）の“招收这批研究生的办法”の“招收这批研究生”という動目構造は，動語の“招收”と目的語の“这批研究生”によって成立しているが，この目的語の“这批研究生”には，代名詞の“这”と量詞の“批”が共起している。

では，上で例示した統語型動目構造（“造大船”，“上过课”，“挂了号”，“救济他们”，“看完电视”，“招收这批研究生”）に対して時相の視点から考察し，その後，論理式による解析を行うことにしよう。

8　限定語における統語型動目構造の論理分析

8.1　“造大船的技术”における“造大船”の論理式

“造大船”の“造”は［持続］の意味特徴を有しているが，目的語の“大船”には形容詞の“大”が生起しているので，概念上，持続動詞の“造”の対象である“船”の性質が明確となり，故に，理論上“造”の［持続］は必ず［終息］を迎えることになる。そのため“造大船”は「有限持続タイプ」の時相構造を有していると見なしえる。そこで“造大船”を論理式で表すと，

（43）造’（ϕ，船）＆有’（船，大）
　　造ル　～ガ　～ヲ　　持ツ　～ガ　～ヲ

となる。（43）の式全体は「誰かが船を造り，かつ，その船が大きいという性質を持つ」と読むことができる。“造’（ϕ，船）”は「誰かが船を造る」という意味を表し，“有’（船，大）”は「船が大きいという性質を持つ」という意を表している。この式で留意すべきは，“有’（船，大）”の部分であり，この式が時相の成立を意味している。

8.2　“上过课的教员”における“上过课”の論理式

“上过课”の時相構造は「有限持続タイプ」であると見なしえる。なぜなら，“上过课”における“上”は［持続］の意味特徴を有しているが，“上过课”には［過去の不確定の経験］の意を表す接尾辞の“过”が生起しているので，論理的な視点から考えると，この“上”の［持続］は限界のある［持続］であると推論できるからである。従って，“上过课”を論理式で記述すると，

(44) 上’（φ，课）＆有’｛上’（φ，课），过｝
スル ～ガ ～ヲ 持ツ ～ガ ～ヲ

となる。“上’（φ，课）”は「誰かが授業をする」という意味を表し，“有’｛上’（φ，课），过｝”は「誰かが授業をするが［過去の不確定の経験］という様態を持つ」という意を表している。つまりこの“有’｛上’（φ，课），过｝”の部分の式が時相の成立を保証させている。そして（44）の式の全体としての読みは「誰かが授業をし，かつ，その誰かが授業をするが［過去の不確定の経験］という様態を持つ」となる。

8.3 “挂了号的同志”における“挂了号”の論理式

“挂了号”の時相構造は「有限持続タイプ」であると理解できる。これは本稿の 4.2 の“买了票”に対する分析と同様である。要するに，“挂了号”は［完了］の意を表す接尾辞の“了”が生起しているが，この“挂了号”には“完”といったような［終息］を保証する成分の意味が既に含まれていると見なす。故に，論理的に，この“挂”の［持続］は際限のある［持続］であると考えられるので，“挂了号”の部分を論理式で表現すると次のようになる。

(45) 挂’（φ，号）＆有’｛挂’（φ，号），完｝＆有’［有’｛挂’（φ，号），
スル ～ガ ～ヲ 持ツ ～ガ ～ヲ 持ツ ～ガ

完｝，了］
～ヲ

“挂’（φ，号）”は「誰かが登録をする」という意味を表し，“有’｛挂’（φ，号），完｝”は「誰かが登録をするが［完成］という結果を持つ」という意味を表し，“有’［有’｛挂’（φ，号），完｝，了］”は「誰かが登録をし終えるが［完了］という様態を持つ」という意を表している。故に，式全体の読みは「誰かが登録をし，かつ，その誰かが登録をし終え，かつ，

その誰かが登録をし終えるが［完了］という様態を持つ」となる。確認しておきたいことは，“有’ ｜挂’（φ，号），完｜”が時相の成立を表している，ということである。

8.4 “救济他们的问题”における“救济他们”の論理式

“救济他们”の“救济”は［持続］の意味特徴を有しているが，この“救济他们”には代名詞の“他们”が生起し，この“他们”は［確定的］であると考えられるので，“救济”の［持続］は必ず［終息］すると解しうる。即ち，代名詞の“他们”が［確定儀］を有するのは［不確定］の“人”が存在する，と推論するのである。そのため，“救济他们”は「有限持続タイプ」の時相構造を有していると判断することが可能である。よって“救济他们”を論理式で表すと，

（46）救济’（φ，人）＆有’（人，他们）
　　救済スル　～ガ　～ヲ　持ツ　～ガ　　～ヲ

となる。“救济’（φ，人）”は「誰かが人を救済する」という意味を表している。そして，“有’（人，他们）”が「人が彼らという対象を持つ」という意を表し，この箇所の式から“救济他们”における時相が成立したことが看取できる。従って，この二つの命題を繋げて読むと「誰かが人を救済し，かつ，その人が彼らという対象を持つ」となる。

8.5 “看完电视的时候”における“看完电视”の論理式

“看完电视”の“看”は［持続］の意味特徴を有しているが，この“看完电视”には［完成］の意を示す結果補語の“完”が生起しているので，論理上“看”の［持続］は必ず［終息］すると判断しえる。つまり，“看完电视”は「有限持続タイプ」の時相構造を有しているのである。そこで“看完电视”の論理表記は，

（47）看’（φ，电视）&有’┤看’（φ，电视），完┤
　　见ル　～ガ　　～ヲ　持ツ　　～ガ　　～ヲ

と表記するのが妥当である。この式の読みは，「誰かがテレビを見て，かつ，その誰かがテレビを見るが［完成］という結果を持つ」である。つまり，この式の中の“看’（φ，电视）”という命題は「誰かがテレビを見る」という意味を表し，“有’┤看’（φ，电视），完┤”という命題は「誰かがテレビを見るが［完成］という結果を持つ」という意を表している。この式の中で注目に値する部分は，“有’┤看’（φ，电视），完┤”であり，これが時相の成立を表現している。

8.6 “招收这批研究生的办法”における“招收这批研究生”の論理式

“招收这批研究生”中の“招收”は［持続］の意味特徴を有しているが，目的語の“这批研究生”には代名詞の“这”と量詞の“批”が修飾語として生起していることにより，論理的な角度から考えると，“研究生”に対して行われる“招收”の［持続］の量は“这批”の分だけに制限されると推論しえる。つまり“招收”の［持続］は必ず［終息］するのである。よって，“招收这批研究生”は「有限持続タイプ」の時相構造を有していると理解できる。以上の考察を踏まえて“招收这批研究生”を以下の如く論理表記してみよう。

（48）招收’（φ，研究生）&有’（研究生，这批）
　　受ケ入レル ～ガ　　～ヲ　持ツ　　～ガ　　～ヲ

この論理式の読みは下記の通りである。即ち，

「誰かが大学院生を受け入れ，かつ，その大学院生がこれらという量を持つ」である。この式の中の“招收’（φ，研究生）”という命題は「誰かが大学院生を受け入れる」という意を表している。そして，“有’（研究生，这批）”という命題は「大学院生がこれらという量を持つ」という意味を

表し，この式によって時相が成立したことが看取できる。

次章では動目型複合動詞について論じる。

9　動目型複合動詞について

朱德熙（1982：113）は，

「“吃饭”是粘合式述宾结构，述语“吃”和宾语“饭”都是独立的词。“吃亏”的“亏”是粘着语素，不是词，所以“吃亏”是述宾式复合动词（2.6.1），不是述宾结构。可是述宾式复合动词跟其它类型的复合词不一样，往往可以扩展。」（“吃饭”（食事をとる）は粘着型動目構造であり，動語の“吃”と目的語の“饭”は共に独立した語である。“吃亏”（割りを食う）の“亏”は付属形態素[11]であって，語ではない。そのため“吃亏”は動目型複合動詞（2.6.1 参照）であり，動目構造ではない。しかし，動目型複合動詞は，他の類の複合語とは異なり，時に拡張することができる。）

と述べている。本章では，まず，朱德熙（1982：113）で列挙されている拡張前の動目型複合動詞の例について検討する。

（49）吃亏（割りを食う）

（50）招生（学生を募集する）

（51）制图（図を作成する）

（52）失火（火災が起こる）

（53）阅卷（答案を採点する）

（54）起草（草稿を作る）

（49）−（54）における動目型複合動詞は，いずれも補語や接尾辞あるいは数量詞などが生起していない。そこで，これまでの分析を基に，論理的な観点から考えると，（49）の“吃亏”は，“吃”という動語と“亏”という

目的語によって構成され，(50) の“招生”は，“招”という動語と“生”という目的語によって構成され，(51) における“制图”は，“制”という動語と“图”という目的語によって構成され，(52) の“失火”では，“失”という動語と“火”という目的語により成り立ち，(53) の“阅”は動語の“阅”と目的語の“卷”によって成立し，そして (54) の“起草”は，“起”という動語と“草”という目的語によって形成している，と理解しえる。

さて，今度はこれらを論理式で解析してみよう。“吃亏”，“招生”，“制图”，“失火”，“阅卷”，“起草”の順で論理表記する。次の第十章を見られたい。

10　動目型複合動詞の論理分析

10.1 “吃亏”の論理式

“吃亏”を論理式で表現すると下記のように書くことができる。“吃’(φ，亏)”は「誰かが割りを食う」という意味を表している。

(55) 吃’(φ，亏)
　　食ウ　～ガ　～ヲ

10.2 “招生”の論理式

“招生”を論理式で示すと，

(56) 招’(φ，生)
　　募集スル～ガ　～ヲ

といった式となる。“招’(φ，生)”は「誰かが学生を募集する」と読むことができる。

10.3 “制图”の論理式

“制图”の論理式は，

（57）制’（ϕ，图）
　　作成スル～ガ　～ヲ

となる。“制’（ϕ，图)”は「誰かが図を作成する」という意を表している。

10.4 “失火”の論理式

“失火”を論理表記すると以下のような式となる。

（58）失’（ϕ，火）
　　起ル　～デ　～ガ

“失’（ϕ，火)”は「何処かで火災が起こる」という意を示している。

10.5 “阅卷”の論理式

“阅卷”に対して論理表記すると，

（59）阅’（ϕ，卷）
　　採点スル～ガ　～ヲ

となり，この“阅’（ϕ，卷)”が表す意味は「誰かが答案を採点する」である。

10.6 “起草”の論理式

そして“起草”を論理式で書くと，

（60）起’（ϕ，草）
　　作ル　～ガ　～ヲ

といった式ができる。“起’（ϕ，草)”は「誰かが草稿を作る」という意を示している。

次の第十一章では動目型複合動詞が拡張した場合の例を見られたい。

11　動目型複合動詞拡張後の動目構造について

動目型複合動詞が拡張した後の例として，朱德熙（1982：113）は，以下の六つを挙げている。

（61）吃点亏（ちょっと割を食う）

（62）招一次生（一度学生を募集する）

（63）制一张图（一枚図を作成する）

（64）失了几次火（数回火災が起こった）

（65）阅过卷没有（答案を採点し終えましたか）

（66）起个草（一つ草稿を作る）

（61）から（66）までの例には量詞，数詞，接尾辞あるいは補語が生起している。従って，これらは以下のように理解できる。即ち，

（61）の“吃点亏”という動目構造は，動語の“吃”と目的語の“亏”の間に量詞の“点”が生起している。（62）の“招一次生”は，動語の“招”と目的語“生”の間に“一”という数詞と“次”という量詞が生起している。（63）の“制一张图”は，動語“制”と目的語“图”の間に数詞の“一”と量詞の“张”が生起している。（64）における“失了几次火”は，“失”が動語で“火”が目的語だと見なしえるが，この成分の間には，数詞の“几”と量詞の“次”が生起し，さらには［完了］の意味を示す接尾辞の“了”が生起している。（65）の動目構造の“阅过卷”は，［完成］の意を示す結果補語の“过”が動語“阅”と目的語“卷”の間に生起している。（66）における“起个草”という動目構造は，動語の“起”と目的語の“草”の間に量詞の“个”が用いられている。

そして，朱德熙（1982：113）は拡張の有無について以下のように述べ

ている。

「扩展以前是复合词，扩展以后就成了组合式述宾结构。在由复合词扩展成的组合式述宾结构里，述语和宾语往往不能彼此分离，例如只能说“失了一次火”，不能说“失了一次”；可以说“起了草”“起了个草”，可是不能说“一个草”。」（拡張される前は複合語であり，拡張されると統語型動目構造となる。複合語から拡張されてできた統語型動目構造は，通常，動語と目的語を分離することができない。たとえば，“失了一次火”（一度火事を起こす）とは言えるが，“失了一次”とは言えない。また，“起了草”（草稿を作った）や“起了个草”（一つ草稿を作った）とは言えるが，“一个草”と言うことはできない。）

さて，次章では時相の角度から動目型複合動詞が拡張した後の例を考察し，それらを論理式で表現することにする。

12　動目型複合動詞拡張後の動目構造の論理分析

以下，“吃点亏”，“招一次生”，“制一张图”，“失了几次火”，“阅过卷没有”，“起个草”に対して順番に論じる。まず“吃点亏”について考えてみよう。

12.1　“吃点亏”の論理式

“吃点亏”の“吃”は［持続］の意味特徴を有しているが，“吃点亏”には量詞の“点”が生起しているので，“吃”の［持続］の量が限定され，必ず［終息］すると解すことができる。従って，“吃点亏”の時相構造は「有限持続タイプ」であると見なしえる。そこで“吃点亏”は，

(67) 吃’（φ，亏）＆有’（亏，点）
　　食ウ　～ガ　～ヲ　持ツ　～ガ　～ヲ

といった論理式を造ることができる。この論理式は「誰かが割りを食い，かつ，その割はちょっとという量を持つ」という読みが適切である。つまり，“吃’（φ，亏）”の部分は「誰かが割りを食う」という意味を表し，“有’（亏，点）”の部分は「割がちょっとという量を持つ」という意を表している。この“有’（亏，点）”の式が時相の成立を表現している。

12.2 “招一次生”の論理式

“招一次生”における“招”は［持続］の意味特徴を有しているが，“招一次生”には数量詞の“一次”が生起しているので，“招生”という動作行為が一度行われると，論理上，それで終わりを迎えると推論しえる。要するに，この“招”の［持続］は，“一次”の生起により限られた［持続］を展開し，故に“招一次生”は「有限持続タイプ」の時相構造に当て嵌まる，という見解を導くことができる。そこで“招一次生”に対して論理表記を施すと次のようになる。

（68）招’（φ，生）＆有’｛招’（φ，生），一次｝
　　募集スル～ガ　～ヲ　　持ツ　　～ガ　　～ヲ

（68）の論理式は「誰かが学生を募集し，かつ，その誰かが学生を募集するが一度という量を持つ」と読むことができる。即ち，この式の“招’（φ，生）”という命題は「誰かが学生を募集する」という意を示し，“有’｛招’（φ，生），一次｝”という命題は「誰かが学生を募集するが一度という量を持つ」という意味を示している。留意されたいのは，この“有’｛招’（φ，生），一次｝”の部分の式が時相の成立を表現していることである。

12.3 “制一张图”の論理式

“制一张图”の“制”は［持続］の意味特徴を有しているが，“制一张

图”の中には数量詞の“一张”が生起しているので，この“制”は際限ある［持続］である，と判断しうる。即ち，“制一张图”は「有限持続タイプ」の時相構造を有しているのである。以下は“制一张图”を論理表記したものである。

（69）制’（φ，图）＆有’（图，一张）
　　作成スル～ガ　～ヲ　持ツ　～ガ　　～ヲ

“制’（φ，图）”は「誰かが図を作成する」という意味を表している。そして時相の成立を表現している“有’（图，一张）”という式は「図が一枚という量を持つ」という意を表している。よって，この二つの命題を続けて読むと，「誰かが図を作成し，かつ，その図が一枚という量を持つ」となる。

12.4 “失了几次火”の論理式

“失了几次火”の“失”には［持続］といった意味特徴が備わっているが，“失了几次火”には数量詞の“几次”が生起しているので，この“失”の［持続］は有限的であると見なし，“失了几次火”は「有限持続タイプ」の時相構造を有していると考えることができる。故に“失几次火”は，

（70）失’（φ，火）＆有’｛失’（φ，火），几次｝
　　起ル　～デ　～ガ　持ツ　　～ガ　　～ヲ

という式が書ける。“失’（φ，火）”は「何処かで火災が起こる」という意味を表し，“有’｛失’（φ，火），几次｝”は「何処かで火災が起こるが数回という量を持つ」という意を表している。つまり，式全体は「何処かで火災が起こり，かつ，その何処かで火災が起こるが数回という量を持つ」という意を表している。確認されたいのは，この“有’｛失’（φ，火），几次｝”の論理式が時相の成立を意味していることである。

なお，“失了几次火”には［完了］の意を示す接尾辞の“了”が生起し

ているので，これを論理式に加えると，

(71) 失’（φ，火）& 有’｛失’（φ，火），几次｝ & 有’［有’｛失’（φ，火），几次｝，了］
起ル ～デ ～ガ 持ツ ～ガ ～ヲ 持ツ ～ガ ～ヲ

といった式となる。つまり（71）は“失了几次火”の論理式である。“失’（φ，火）”は「何処かで火災が起こる」という意味を表し，“有’｛失’（φ，火），几次｝”は「何処かで火災が起こるが数回という量を持つ」という意味を表し，“有’［有’｛失’（φ，火），几次｝，了］”は「数回何処かで火災が起こるが［完了］という様態を持つ」という意を表している。

要するに，（71）の式全体の読みは「何処かで火災が起こり，かつ，その何処かで火災が起こるが数回という量を持ち，かつ，その数回何処かで火災が起こるが［完了］という様態を持つ」となる。

12.5 “阅过卷”の論理式

“阅过卷”の中の“阅”は［持続］の意味特徴を有しているが，“阅过卷”には結果補語の“过”が生起し，これが［完成］の意を表しているため，この“阅”の［持続］は永遠に続かず，必ず［終息］を迎えると解しえる。従って“阅过卷”の時相構造は「有限持続タイプ」であると考えられるので，“阅过卷”を論理式で解析すると，

(72) 阅’（φ，卷）&有’｛阅’（φ，卷），过｝
採点スル ～ガ ～ヲ 持ツ ～ガ ～ヲ

となる。この（72）は，“阅（φ，卷）”が「誰かが答案を採点する」という意を表し，“有’｛阅’（φ，卷），过｝”が「誰かが答案を採点するが［完成］という結果を持つ」という意を表しているので，式全体としては「誰かが答案を採点し，かつ，その誰かが答案を採点するが［完成］という結

果を持つ」と読むのが望ましい。注目すべきは，この“有’｛阅’（φ，卷），过｝”の箇所の式がこの動目構造における時相の成立を表現している，ということである。

12.6 “起个草”の論理式

“起个草”の時相構造は「有限持続タイプ」であると理解すべきである。その所以は，“起”は［持続］の意味特徴を有しているが，“起个草”には量詞の“个”が生起しているので，“起”の［持続性］には際限がある，と考えられる点にある。従って，この“起个草”を論理表記すると，

(73) 起’（φ，草）&有’（草，个）
　　作ル　～ガ　～ヲ　持ツ　～ガ　～ヲ

となる。まず“起’（φ，草）”は「誰かが草稿を作る」という意味を示している。そして，時相の成立を表現している“有’（草，个）”の部分の式は「草稿が一つという量を持つ」という意を示している。そのため，この論理式全体は，「誰かが草稿を作り，かつ，その草稿が一つという量を持つ」という意を表している，と理解しえる。

13　動目型複合動詞が目的語を伴う場合

本章では動目型複合動詞が目的語を伴う場合について考える。以下の引用は朱德熙（1982：113）からのものである。

「有些述宾式复合动词，一方面可以扩展成组合式述宾结构，另一方面，作为动词，还能带宾语，例如：起草文件，留神汽车。」（ある動目型複合動詞は，一方で，拡張されて統語型動目構造となることができ，もう一方では，動詞として目的語を伴うことができるものがある。たとえば，“起草文件”（文書を起草する），“留神汽车”（車に気をつける）がそれ

にあたる。）

そこで，この“起草文件”と“留神汽车”を論理式で表記してみよう。まず“起草文件”を論理表記すると，

（74）起草’（φ，文件）
　　起草スル　～ガ　　～ヲ

と解析できる。“起草’（φ，文件）”は「誰かが文書を起草する」という意味を表している。

次に“留神汽车”は，

（75）留神’（φ，汽车）
　　気ヲツケル ～ガ　　～ニ

といった式を書くことができる。“留神’（φ，汽车）”は「誰かが車に気をつける」という意を表している。

以上により，動目型複合動詞が一つの動詞として目的語を伴った場合の例を論理式によって解析することができた。

14　結びにかえて

本稿は朱德熙（1982）が著した《语法讲义》の 8.3（112 頁–113 頁）における動目構造を時相（phase）の観点から考察した。その結果，統語型動目構造は時相の概念を有し，「有限持続タイプ」または「無限持続タイプ」に当て嵌まるということを提示し，朱德熙（1982：112）が分類した粘着型動目構造と統語型動目構造が有する特徴を指摘し，両者の差異を明らかにさせた。また，朱德熙（1982：112–113）の用例を論理式によって厳密に表記し，各例に内在する意味を明確に表現した。

注釈

1）原文にある“粘合式述宾结构”を「粘着型動目構造」と訳し，“组合式述宾结构”を「統語型動目構造」と訳したのは，朱德熙（1982）の訳本である杉村，木村（1995：146）の翻訳に従った。

2）原文の“述语”を「動語」と訳したが，これは朱德熙（1982）の訳本である杉村，木村（1995：146）に従った。

3）青木（2014a）を参照されたい。

4）本稿の論理式における括弧は“（　）”，“｜　｜”，“［　］”の三つを使用し，“（　）”が最も作用域（scope）が狭く，“［　］”が最も作用域が広いと仮定する。即ち下記の（a）のように考える。

（a）（　）＜｜　｜＜［　］

（a）は，“（　）”は“｜　｜”より作用域が狭く，“｜　｜”は“［　］”より作用域が狭いことを表している。

5）この式では“有”が用いられているが，これは『論理哲学論考』（ウイトゲンシュタイン著，野矢茂樹訳：184）における記述を拠り所としている。野矢は論理形式について次のような注釈を与えている。

「ある対象の論理形式とは，その対象がどのような事態のうちに現れうるか，その論理的可能性の形式のことである。たとえばある対象 a が赤い色をしていたとしよう。対象 a にとって赤いという色は外的性質であり，他の色をもつこともありえた。つまり，〈a は青い〉〈a は黄色い〉等の事態も可能である。このことを「対象 a は色という論理形式をもつ」と言う。……」

故に，本稿の論理式において“有”を用いた場合には，以上の「論理形式」の概念に基づいて使用したとする。なお論理式についてのより詳しい記述は青木（2014b）を見られたい。

6）青木（2014b）を参照されたい。

7）これは Chao（2011（1968）：267）の見解に依拠している。つまり Chao（2011（1968）：267）の記述によると，“死掉了”は北方官話では“死了”と表現し，この“了”はすでに動作行為の［終息］の意を含意し，“掉”や“脱”などの意味を代替する，ということが分かる。

8）松村（2015）を参照されたい。

9）朱德熙（1982）の訳本である杉村，木村（1995：147）では原文に存在する“招收研究生办法”の例が見られない。

10）朱德熙（1982）の訳本である杉村，木村（1995：147）では原文に存在する“招收这批研究生的办法”の例が見られない。

11）原文の“粘着语素”を「付属形態素」と訳したが，これは朱德熙（1982）の訳本である杉村，木村（1995：147）に従った。

参考文献

青木萌 2014a.「現代中国語における時相構造の「量化」現象」,『人文研究』第 183 集。神奈川大学人文学会。

青木萌 2014b.「現代中国語における副詞“在”の意味と論理」, 神奈川大学大学院博士論文。

ウィトゲンシュタイン著, 野矢茂樹訳 2003.『論理哲学論考』。東京：岩波文庫。

朱德熙著, 杉村博文, 木村英樹訳 1995.『文法講義』。東京：白帝社。

松村文芳 2015.「中国語学研究Ⅲ b」講義ノート（2015 年 10 月 9 日）。

龚千炎 1995.《汉语的时相时制时态》。北京：商务印书馆。

朱德熙 1982.《语法讲义》。北京：商务印书馆。

Chao, Yuenren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. University of California Press.

Chao, Yuenren. 2011（1968）. *A Grammar of Spoken Chinese*. 商务印书馆.